

(プシュパラル先生発表)

どうもみなさんこんにちは。第4回人間の安全保障学会の時にはお世話になりまして、ありがとうございました。まあ、初めにその成果ということで、少し紹介した後で、本題に入りたいと思います。本当に今日は、お三方の話は参考になりました。私の話は少し短めにしたいと思いますけど。先ず、第4回大会の性格ということなんですけれども、分科会は3つに分かれてやりました。6日(9月)には、オープンセッションが2つありまして、1つは1時から、南町の馬場町長と南三陸の佐藤町長、後チェルノブイリ原発関係のウラディミール博士の3人の話を聞いた上ですすね、東北大学の奥本(先生)という原発賛成派の人がモデレーターで、プレリミナリーセッションをやりました。これはもちろん、人間の安全保障学会会員のほかに、市民も参加できる者でした。その第2部としては、クレイグ・マーフィー先生と峯先生、後は長先生のオープンセッションもありました。その他にですすね、6日の日にも7日の日にも分科会が3つありまして、おかげさまで50件の発表、それなりにとても素晴らしいいろんな分野のものがありました。特に、災害の関係とかですすね、移民関係とかですすね、そういう発表が主なものでした。それで、紫の色で示した部分は東北大学の医学研究科の学生たちの発表が多くありました。まあ、いわゆる伝染病関連のものですすね。他にもさまざまな人間の安全保障関係の研究がありました。お金を払って参加した人は99人いましたが、懇親会では、武者小路先生のビデオを見ながらやりました。天気にも恵まれて非常に良い会議だったと思います。来年もそういう形でできればいいなと思います。人間の安全保障学会の話はここまでにしたいと思います。

(次のスライド)

ここは、ですすね、私が26年前日本に初めて留学生として来たときには、福島県にお世話になりまして、飯館村に長い間お世話になっていたんですすね。あの、この26年間も東北にいまして、今日は大沼先生は仙台のことは何も話してないから、私も被爆しているんじゃないかとちょっと心配しています。その辺の話は後でちょっとしたいと思いますけど。あの、僕は原発事故の時も、もちろん多賀城にいましてですすね、ずっと逃げられなかった外国人の1人であります。みんな逃げたんですけれども。その辺でも被爆の問題が心配ではありますすね。この3.11によってですすね、海岸地域を細かく歩き回るチャンスがありまして、調査のために先ずこの南三陸の町長の佐藤町長にあたりとか、後は岩沼に調査に行ったりとか、後これは南相馬ですすね、この方(スライドの写真の上から3段目の左側)はかなり原発反対派なんですけれども、発言をしているところすすね。後は、この(左下4段目の写真)馬場町長ですすね、初めて会ってから好きになって何回も会いに行つて話を聞いたりとか、調査をしたりとか、今回はその関係で日本減の安全保障学会に来て頂いて、佐藤町長もですが、自分の悩み、訴えたいことなどを話していただいたんですすね。今日私が話すことは、この馬場町長から聞いた話を少し皆さんに紹介したいと思います。

(次のスライド「原発の爆発」)

これは、あまり出回ってはいないんですが、福島原発の爆発の時の写真なんですけれども、

この写真を見る限り、これは、多だの水素爆発ではなくて、チェルノブイリのような爆発だったんじゃないか、ということを使う人はいくらでもあります。だからこの写真は公開していない、と。ほんとのことは私はわかりませんので、そういう風に言う人のことを私は聞きました。

(次のスライド)

この地図のここが浪江町、そしてここが福島第一原発ですね。僕は「波江の涙」という言葉をよく使ってるんですけども、後で先生たちにも後で配りたいと思っているんですけども、この本は、国連大学と東北大学が行った会議がありまして、それをまとめたものです。その中に波江の涙ということで書いてあります。何で波江の涙というかというと、町長さんに聞くと、いつもは東風が吹くんですけど、その日だけは西風が吹いていたっていうんです。それでも（多賀城にいる）私たちにとっては運がよく、風は北西側に吹いていたんですけど、この風でちょうど波江が覆われてしまっているんです。これがその日にだけあった現象だと町長さんは言うんですね。福島第一原発の事故があったことで恩恵（事故後の政府などからの補助等）があったのは、伊藤町の人であって、浪江町の人ではない。でも、原発の事故の時には、放射能は浪江町も覆っていたんですが…。あともう 1 つは、浪江町の人が避難したところは福島活性化センターというところで、そこで 1 週間避難していたわけですけども、ここは、（地図上の）赤いエリアに入っていて、一番被ばく量の多い地域で 1 週間避難していたっていうことになりますね。

(次のスライド)

このように、海の近くの豊かな地域が浪江町なんですけれども、

(次のスライド)

3月11日には、このようにやられている（津波で街がおおわれている写真）。この中学校（写真にある）だけは、まだ残ってますけど。

(次のスライド 災害初期の状況)

この表は、人間の安全保障学会の時に馬場町長が使ったもので、私が作ったものではありません。ここに馬場町長が何を訴えたいかということが書いてあります。基本的に規定によれば、福島原発に何かあったとしたら、政府が自治体に教えるということになっているんですが、それは果たされなかったということです。馬場町長はそれをすごく強く訴えています。ここに「報道による事実の確認」と書いてあるのがそれです。町長は、たまたまテレビを見て自分で判断をしていたということなんです。ここに載せてある「報道による事実確認」とはそういうことです。ですから、自分で判断して逃げて行っただけであって、政府からは何も指示がなかったということです。私がこれを不審に思うかと言えば、チェルノブイリ原発事故の時は、 коммуニストだから報道せずに隠したんだとよく言われていたんですが、それは本当の理由ではないということです。 коммуニストではない 2011 年の日本でも同じ事故が起こっているわけですから。これを聞いてウクライナの人是非常にびっくりするわけですね。

(次のスライド)

これも馬場町長のお話からですけれども、波江の被災状況は、2万人以上の全町民が福島県内外に避難しております。県内に約70%、県外が約30%です。経済的にも大きな損失が出ています。たくさんのお店も波江から逃げています。これ(スライドの右上の写真)は、ちょうど避難するときの状況を表した写真です。多くの車が避難しようとしているんですが、車が動かない状況です。これ(右下の写真)は、福島活性化センターで避難している様子です。

(次のスライド)

(福島の事故では)、データでは表すことのできない被災もあります。津波でやられて、(避難指示が出たために逃げ遅れたかもしれない人たちを捜索に行くことができずに)避難し遅れた人たちを取り戻すことができないという状況がありました。そういう状況ですから、高齢者などは、直接被爆して亡くなったわけではなくて、病院に行っても混雑していて薬をもらうこともできずに亡くなった方が800人くらいいたということを知りました。また、あの状況ではどこが放射能(の線量)が一番高いかはわからないことですから、特に福島活性化センターという高放射能のところでずっといるということになりました。それは情報が足りないからってということなんです。こうやって考えてみますと、でいたる・アースでもグーグル・アースでもですね、そこに(放射線量が高いこと)を示すことのできる技術があれば、非常に役立つのではないかと思います。

(次のスライド)

これは、2013年10月11日にキエフ工科大学っていうところで福島・チェルノブイリワークショップというのを開催したんですけど、その時にオヤマコウイチさんが発表したもの(の一部)です。(彼が訴えていたこと)の1つは、山から出てくる葉っぱなどには黒い物質が付着しているということです。(これは)ものすごい放射能が高くて104マイクロ(シーベルト)を超えています。こういう物質が様々な所で出てきます。

(次のスライド)

私自身も1度測ったんですけど、これは二本松から浪江町に向かう道ですが、この辺で非常に高い、考えられないほど高い375マイクロシーベルトという高い値を示す黒い物質がありました。これは山奥ですけども、子供たちが学校に行く道でもですね、高い放射能の値を示す物質が見られます。

(次のスライド)

このようなことは、もちろん福島だけでなく、(大沼)先生の話にも合ったんですけども、日本海側にも(放射能が)飛んでいる場所があるんですね。(尾山さんたち)が、そういうことを測っているんですね(福島県外の250か所で黒い物質が発見されている)。

(次のスライド)

これは、(原発事故以後その影響に基づいて)5つのゾーンに分けていることを示しているも(地図)のです。この中で緑色の部分は強制的に避難させてはおらず、人々は戻っているんで

すけども、強制的に避難させているのは、1年間で50ミリ・シーベルト以上の線量があり、福島原発から20キロ圏内の地域だけなんです。ただ、一番問題なのは、この黄緑色のところなんです。この地域の人々には、もし出たいんだったら出てもいいんですけど、何も補助はしないと、保証はしないということなんです。これが非常に大きな問題なんです。この辺(強制的に移住させられる地域の)の人々には、月1人10万円、ですから4人家族だったら40万円の補助がありますから、まあまあいい生活ができるんですけど、いま悩ましい問題になっているのは、この黄緑色の地域の方々なんです。私も関係のある、ウエハラさんっていう南相馬の人はこの問題に関して色々な活動をやっています。彼らは1ミリ・シーベルト以下だったら、戻ってもいいが20ミリ・シーベルト以上だったら戻さない(ようにすべきだ)という活動をしています。我々が議論すべきことは、黄緑の地域が本当に安全なのかということです。大沼先生の話を知っていると、安全な所はないような気がします。まあ、基本的にこの辺の人たちはもう一般的な生活をしています。私も、もう何回も行って泊まったこともあります。

(次のスライド)

3.11の被害は4つの区分に分けて考えられます。1つは、地震の被害だけを受けた地域です。後は地震と津波っていう区分、あるいは津波だけの場所、もう1つは福島原発の被害を受けた地域です。ただ、この福島原発の被害を受けた地域は2つに分けることができます。1つは強制的に避難させる地域ともう1つは自発的に避難を任せる地域です。出たいんだったら出なさいっていう地域ですね。それでいろいろなカテゴリーに分けてですね、生活補助(Compensation on living expenses)があるかどうかを示してあります。(原発から)20キロ以上離れている地域とその圏内に含まれる地域の人々には違いがあり、20キロ圏内に含まれない人たちは保証がありません。また、健康被害の危険(Health Risk)はないこともないかも知れない。あるかも知れない。それはわからない。また、社会的差別(Social Discrimination)の問題ですね。これは、お前は福島の人間だからといって差別されることがものすごく多いです。また、それだけではなくて、例えば、僕はスリランカに行ったらあなたも被爆してるんじゃないですかって言われるんですね。そのような状態ですから、もちろんそれ(差別)はありますね。2012年頃には、仙台でも「あっ、あの子は福島」っていうんですね。また、トヨタレンタカーで福島に、浪江町に直接行く人には車は出さないってこともありました。私たちは一端南相馬に行って、それから新しい車を借りて浪江町なんかに入っていました。産物の市場価値(Market Value for products)っていうのは、もちろん福島全体に大きな影響がありますね。それは仙台でも福島でも、同じところ(地域)でも買わないですね。この(スライドの表の)赤い場所っていうのは、非常に残念な所なんですけど、一番問題なのは、南相馬みたいな20キロ圏内には入らない地域で、そこに近い地域です。

(スライドの表の)

ですから、同じ3.11でもいろいろな地域で様々な差別が出ています。宮城県、福島県、すぐ隣の近い県なんですけれども。宮城県の場合はですね、人がどんなことで悩んでいるか

っていうと、先ず、次の津波があるかも知れないっていう心配があります。私自身はものすごい自信がありますけども、もう 1 度 3.11 みたいな津波があってもやられないっていう自信があります。そのぐらい強いコンクリートの壁を作ってるし、あるいは社会基盤を作っています。次のコミュニティの隔離(**Segregation of Community**)ってというのは、昔は集団で住んでいた人たちがばらばらに済むことになるっていうことです。また、農漁業などの地域産業の復活ってというのは、それらの産業が復活させることが可能かどうかっていうことです。そして最後は、彼らが自治体からもらっている支援がいつまで来るのかっていうことです。例えば、東京でまた地震なんかがあったとすれば、東北の人々には支援は来ないだろうという不信感を東北の人々は持っています。これが宮城県の問題だったんですけどお、福島県ではなにを心配しているかっていうと、もちろん健康被害 (**Health Risk**) ですね。自分や子供の体がどうなるんだろうっていうことです。後は、若い世代との分離 (**Separation with younger Generation**) ですね。福島県内に住むのは、高齢者の爺さんや婆さんだけで、もちろん、孫なんかは一緒に住まない。次に、近隣者同士の水平的不平等 (**Horizontal Inequality among neighbors**) ですね。県境に住んでいる人の間でもですね、あなたは 10 万もらってるけど、私はもらってないっていうことがあります。これは、ものすごい差ですね。また、外で活動することができないってことですね (**Lapse in Outdoor Activity**)。後は、例えば、農産物なんかの生産品が売れないっていうことですね。このように、宮城県と福島県の間でも、悩みは違うんですね。

(次のスライド)

そうしますと、人間の安全保障という観点からするとですね、それは恐怖からの自由っていうのを語るものですが、私は恐怖というのは、2 つに分けて考えるべきだとも思っています。それは「見える脅威」と「見えない脅威」です。宮城県の場合、見える恐怖が強くて、福島県では見えない恐怖が強いわけです。見える恐怖ってというのは、物理的な解決策があります。津波の場合は、それにやられない街づくりができます。技術やお金があれば、地震に耐えられる家を作ることもできるでしょう。でも、見えない脅威ってというのは、物理的解決策はないんですね。これは人間の安全保障として考えるべきことですね。

(次のスライド)

ところがですね、大沼先生に似てるところがありまして、私もチェルノブイリに 1 年くらい前に行きましてですね、この写真を撮ってきました。非常に自然豊かな場所ですね。それでこういう花があります。ものすごくきれいな花です。ただ、この花も 1.32 ミリ・シーベルトというものすごい高い放射能の値を示しています。こういうリンゴもありますが、非常に高い放射能を持っているため、だれも食べることはありません。こういう海辺にも行ったわけですけども、1 人は原発賛成派、2 人は原発反対派でした。私がどっちはかっていうとわからないままですね、活動したんですけども。それで、セタミール(?)っていう村を徹底的に調査したんですけども、90%の人が原発に原因がある病気にかかっているということを訴えていました。ただ、それは科学的に証明されてはいませんが、ただ、16 歳

の子供が最初癌で亡くなったということを聞きました。

(次のスライド)

そこ(チェルノブイリ)に行ったのはですね、そこから学んで、福島について考えたかったんですけども、先ず1つは、チェルノブイリと福島では、ヨウ素131の飛散状況は10倍の差があります(チェルノブイリの方が多い)。だから、これは、日本の学者たち、特に東北大学の医学系の学者たちは、これは比較できないものだと言います。そういうこともあります。

(次のスライド)

ただ、このデータはウクライナの原子力関係の研究の責任者のトロンコさんという方がとったチェルノブイリ原発事故の結果としてのヨウ素131の累積飛散状況のデータですが、このようになっています。

(次のスライド)

これは、1986年時点での青年期人口の10万人当たりの甲状腺がん発生率のデータですが、これは、信用できるデータだと思います。15歳から18歳の子供たちのデータです。86年から2005年までのデータです。このように、チェルノブイリに近いウクライナ北側の6県(赤い線)のデータと南側の21件のデータ(黄色い線)です。明らかにチェルノブイリに近いところでがんが多く発症しています。これは、最近のデータで昔はこういうデータは出さなかったということです。トロンコさんはかつて原発賛成派だったということですけど、今はちょっと変わっているということでした。このデータは客観性があるデータだと思います。

(次のスライド)

このデータは19歳から42歳の方々のデータですが、同じような傾向を示しています。福島でもですね、甲状腺がんは増えているってことをある記者さんのグループが言っています。ただ、それを批判する人たちもいます。(記者さんたちが言っているのは原発由来の)ヨウ素が関係しているかかどうかわからないということです。ただ、このデータは納得のできるデータだと思います。

(次のスライド)

これは、フクモト先生が発表したデータです。放射能は危ないのか、危なくないのかという議論が学者の中であります。この方は、福島は安全だということまで話をします。その方が言うことには、これは秋田県の玉川温泉なんですけど、がんを治したいと考える人たちがこちらに来て1週間、2週間、1か月泊まりますと、癌をある程度癌を治せるんだ、という話です。こちらは、1年間で3.6シーベルトの(放射能を浴びることになる)所ですね。何が問題点かという、葉切りわかることとわからないことがあることです。こちらはわかることですが、例えば、4ギガくらいあれば(放射能を浴びれば)もちろん死んでしまうわけです。LD 50/60くらいになれば、60日くらいで死んでしまいます訳です。これはものすごい高い放射能を浴びた場合の話です。また、そうでなくとも、癌になるリスクは高くなります。これは、高い放射能の場合ですね。これははっきりわかっています。はっきりわからな

いのはこういうものですね。No immediate effect secure cancer?、Impacts of offspring?、Low level good for health?、こういうものは本当に関係あるのか、癌になるのか、あるいは遺伝子が壊すと言ってるけれども、沿って指令れば直してくれるっていう人もいます。これ、テキサス工科大学の研究もあります。NHKはそういう番組を作っていますが、それを見ると、やはりそれは正しいんじゃないかっていうこともあり得る。レベルが低い者であれば、それは健康にいいんだっていう議論もあります。また、人工的な放射線が体に悪いのであって、自然であれば、それは体にいいんだっていう議論もあります。学者の中で放射能が悪いのかいいのか、議論が分かれています。大沼先生のように、学者に任せていてはだめだという意見もありますけれども。

(次のスライド)

私が一番面白いと思っているのはこういうことです。シーベルトっていうのは、大昔の学者なのであって、1シーベルトがどれくらい大変なものなのか分からないんです。1キログラムだったらこれくらい重いか、1キロ歩くっていうことはこれくらい大変だろうということはわかりますが、こういうもの(シーベルト)は、想像ができない。100ベクレルだったらいいのか10ベクレルだったらいいの、わからない。もし、サイエンス・コミュニケーションとして可能であれば、何が真実であるのかを知りたい。

(次のスライド)

ここからは、人間の安全保障の本質について語りたと思いますけど、これについて語る時は、1994年の人間開発報告を見なくてははいけません。そこで、原発が人間の安全保障のどんなところに関係があるのかを私は調べたことがあります。それは、ここですね。それは、環境安全保障というところです。Many environmental threats are chronic and losing-lasting. Others take on a more sudden and violent character. Bhopal and Chernobyl are the more obvious sudden environmental catastrophes. ということで書いてある。これは、環境安全保障の中で書いていることです。ここで書くっていうことは、他の汚染物質と同じような考え方をしています。例えば、油を川に流すっていうのと同じような重さでこの人間開発報告の中に書いてある。これは、非常に不思議だと思っています。というのは、この問題は、環境安全保障の問題として書けるものではなくて、人間の恐怖として書くべきではないでしょうか。

(次のスライド)

また、他のところでも、このレポートは、恐怖を感じるために、私がいて私の敵がいて、ボクシングファイトみたいなものをやらないと、それは恐怖としては論じないと言っているわけです。また、他にも、拷問やエスニックな緊張、レイプ、家庭内暴力、幼児虐待など、物理的な相手がいないと成り立たないものとして書いてあります。つまり、恐怖として認められるのは、相手がいるものだけだと言っていることになります。ただ、恐怖の中には、見えない恐怖もあるわけで、そういう意味では人間の安全保障という観点からは、人間開発レポートは考え直さなければならぬのではないのでしょうか。人間の安全保障学

会としては、それを強く訴えるべきなのではないでしょうか。ただ、面白いのは、22 ページ(第2章)から1994年の人間開発報告はこういうことを言っています。We need another profound transition in thinking ---from unclear security to human security.です。また、他のところで、although nuclear explosion devastated Nagasaki and Hiroshima, humankind has survived its first critical test of preventing worldwide devastation…、まあ、長崎と広島は(原爆が投下されたものの)何とか助かったと言っているわけです。それで、その後、But five decades later, we need another profound transition in thinking from nuclear security to human security とあります。これを見ると、今我々には核による安全保障がある、というようなニュアンスを感じてしまいます。今は核による安全保障がある時代なんだということを言われているような感じがします。今は核による安全保障があるから、これからは人間の安全保障を考えなくてはいけなんでしょう、ということを言われているような感じがします。とても人間の安全保障が軽く扱われている感じがします。例えば、福島原発は誰かが爆撃したわけでも、爆弾を仕掛けたわけでもない(つまり、ボクシングファイトがあったわけではないので、恐怖には当たらないと言われている感じがします)。福島原発(の問題)は、東電が何もしないから文句を言ったりするという意味ではボクシングファイトのようなものもしますが、(本質的には)、核の技術が(何かあった時に)取り返しのつかない(程の影響を与えるような怖い)技術だからなんです。それは、ある意味仕方のないことかもしれませんが、そこには(ボクシングファイトをするような物理的な恐怖とは異なる)「見えない恐怖」があるんです。だから、人間開発レポートは「見えない恐怖からの自由」を追加するべきではないでしょうか。そう、私は思っています。

(次のスライド)

福島が安全だという学者たちには、私はいつもこの(柿の)写真を見せます。そして聞きます。あなたはこの柿を食べますか、と。これは、被災地で撮った写真ですが、非常にきれいな柿です。これをあなたは食べないんですか、と私は聞きます。でも、そういう人たちはこの柿を食べないんですね。柿は多くの放射能を含んでいると言われています。

(次のスライド)

最後に、第3回国連防災世界会議が仙台であります。お陰様で私たち東北大学ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラムがパブリック・フォーラムに採択されて、国連大学と共同実施するもので、2015年3月18日に仙台市民会館でありますので、時間があれば是非おいで下さい。

(羽後先生)

これで、今日の報告を終わります。これから、議論に移りますが、少し休憩を致します。その後、武者小路先生と且先生のコメントを頂きます。